

派遣者番号	R2K14	氏名	石井 幸司
研究主題 —副主題—	家庭と学校をシームレスにつなぐ体育の学習評価に関する研究 —マルチステークホルダー・プロセスへの保護者の参加に着目して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	鈴木 直樹
所属	江戸川区立新田小学校	所属長	大石 吉郎

キーワード：学習評価 ICT メディアポर्टフォリオ 体育 保護者

## 1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

東京都教育委員会(2019)は、「東京都教育ビジョン(第4次)」で、第3期教育振興基本計画(文部科学省、2018)を参酌し、施策展開の基本的な方針を12点設定している。そのうちの一点が、「家庭・地域・社会と学校とが連携・協働する教育活動」である。

子供の教育において学校は、保護者とともに協働して責任をもつ立場であり、より一層の連携が求められている。田中(2008)や鈴木(2019)は、学校での学びや学習評価が、家庭での学びにつながる事が大切であると主張している。つまり、子供の成長は学校でも家庭でも支えるということであり、保護者をはじめとした、ステークホルダーの評価行為への参加が重要だということである。

そこで、本研究では、家庭と学校をつなぐ学習評価の機能について、保護者の体育に対する認識を例として明らかにすることを目的とした。このことで、マルチステークホルダー・プロセスに着目した体育における保護者の参加や、家庭と学校をシームレスにつなぐ架け橋となる学習評価の実践に向けての示唆を与える可能性を考察した。

## 2 研究の方法

本研究では、「個別的な場合から出発して一般的な命題を導くような推論」(今井、2010)の方法である、帰納的アプローチを用いて、複数の具体的な事実を明らかにすることからある事実を導き出し、目的に迫りたいと考えた。

具体的には、保護者の体育に対する認識の実態と形成要因を検討し、現在の保護者の認識を把握するとともに、家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価の必要要件を見だし、評価実践へとつなげる。

さらに、明らかになった知見に基づいた学習評価の実践を通して、保護者の体育に対する認識がどのように変容するか、体育に対する認識を支えている価値判断を伴う評価規準がどのように変容するかを明らかにする(図1)。

## 3 研究の結果

### (1) 保護者の体育に対する認識に関する調査

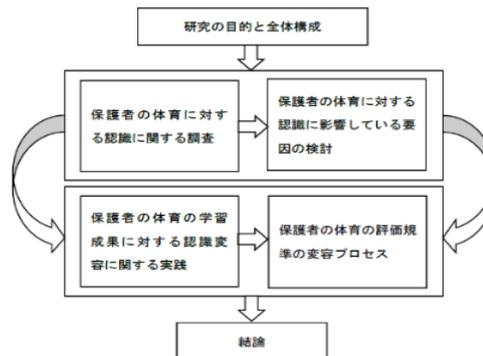


図1 研究の全体構想

まず、小学校第5・6学年の子供をもつ保護者を対象に、異なる四地域で体育に対する認識について質問紙調査を行った。その結果、「体育に好意的だった保護者ほど練習量志向があり、認知主義的学習観をもっている」ことや、「保護者は体育の学習とは教師から与えられた課題ができるようになることが大切である」と認識していることが明らかになった。これらのことから、体育で目的としていることや内容としていることと比較して、保護者の体育に対する認識にズレがあることが分かった。

### (2) 保護者の体育に対する認識に影響している要因の検討

次に、(1)の質問紙調査から明らかになった保護者の体育に対する認識を形成している要因について、修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ(木下、2003)を用いて分析した。その結果、保護者の体育に対する認識は、「学生時代に受けてきた体育」、「体育行事での相対的な技能への称賛」、「体育や部活動での運動量志向の経験」が土台となり、親となってからの子供への願いや子供との相互作用を通して形成されることが分かった(図2)。

一方で、保護者は、子供の学習状況を把握していない実態が明らかになった。このことから、保護者の体育に対する認識を、体育で目指す子供の姿と合致させるためには、保護者と子供の相互作用

用を前提とし、保護者が子供の体育の学習状況を適切に把握することが重要であることが示唆された。従って、保護者と子供の相互作用を重要な機能としている「メディアポートフォリオ」を家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価として用いることで、保護者の認識変容につながる可能性が見いだされた。

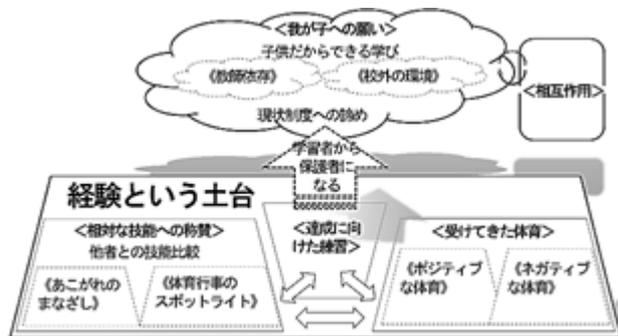


図2 保護者の体育に対する認識形成プロセスの結果図

### (3) 保護者の体育の学習成果に対する認識変容に関する実践

実践では、「メディアポートフォリオ」を用いて子供の学習成果を子供・保護者・教師間で長期的に共有し、保護者の体育に対する認識が変容することを、二要因混合分散分析、テキストマイニング分析、記述内容の具体的事例を質的に分析した。

その結果、保護者は、協調性を育んだり、技能が身に付いたりした「結果」に、体育の価値を求めていた認識から、思考力・判断力・表現力等や運動に主体的に取り組む態度にも着目するようになった。また、子供が豊かに関わり合いながら学ぶ「過程」に、体育の価値を求める認識へと変容したことが明らかになった。これらの変容に影響を与えた要因として、子供との「メディアポートフォリオ」を介した、相互作用が生み出したものであることが見いだされた。

### (4) 保護者の体育の評価規準の変容プロセス

加えて、保護者が「メディアポートフォリオ」を通して長期的に学習評価に参加することで、体育の認識を支えている評価規準が変容するプロセスについて、複線径路・等至性アプローチ(安田・サトウ、2012)を用いて分析した。その結果、保護者の視点から技能について幼少期の我が子のイメージや周りの子供と比較していた「相対評価」から、子供自身の視点で学びを解釈する「絶対評価」に体育の評価規準が変容した。また、子供の表情に注目するようになった保護者は、子供

の体育での学びの現状を認め、子供の内面的な心情を理解しようと変容が見られた。

一方、保護者の認識変容は、家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価を実践すれば、すぐに表れるものではない。「メディアポートフォリオ」を共有した当初は、保護者は子供の技能を他者と相対的に比べている。これは、保護者自らの経験より形成された認識であった。しかし、保護者は子供からの学習状況の報告や、保護者からの子供への称賛やアドバイスという相互作用を長期的に繰り返すことによって、自らの経験により形成された認識を更新させている。それにより、子供の現状を認め、子供に寄り添った関わりをしようとしている。家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価への保護者の参加は、体育の学びを通じた子供理解であり、保護者自身も、自らの認識の変容に気付かされる自己理解のプロセスである。

## 4 研究の考察

本研究では、家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価について、保護者のマルチステークホルダー・プロセスへの学習評価の参加過程により、保護者の体育に対する認識を変容させることが明らかになった。また、学習評価は、保護者自らの経験と「いまーここ」の子供との相互作用による葛藤の渦中における子供理解と自己理解を通し、保護者が子供の学びを支える支援者として成長を促す機能を有していることが明らかになった。

## 5 今後の展望

GIGA スクール構想により、総務省(2017)が学校での学びを家庭とシームレスにつなぐことを推進している。今後、保護者の学校教育への参加が一層進むことが考えられる。このような現状の中で、保護者の教育への参加プロセスを開発することにつながる知見を提示できたことは、本研究の意義であると言える。しかし、保護者の学習評価への参加による教師の成長や変化については明らかになることができなかった。今後、教師間で学習評価の共有による相互作用を通じた、教師の成長を明らかにすることが課題である。